

視覚障害者柔道の歴史と発展についての一考察

泉 高祥（弘前大学）

I. 序論

柔道は、障害者にとっては競技としての面だけでなく、リハビリテーションや健康に良いという面も持っている。その中でも視覚障害者において柔道は、国際大会が行われ、パラリンピックの正式種目にもなるなど著しく競技として発展している。しかし、競技人口が少ない、成績が落ちているといった課題がある。これらの課題の解決策を探し、これから視覚障害者柔道が発展していくためにどのようにしていけばいいのかを視覚障害者柔道の歴史も踏まえて考察、検討していく。

II. 研究方法

文献調査及び、関係者への聞き取り調査

III. 本論

＜視覚障害者柔道の歴史＞

1882（明治15）年に嘉納治五郎により「講道館柔道」が創始されて以来、柔道は健常者と視覚障害者が特別な工夫をしなくても練習や試合ができることからその当時から視覚障害者も健常者に混じって練習をしていた。組織的には、京都盲啞院で、1931（昭和6）年に、この学校でそれまで体育の教材として使っていた相撲を柔道に代えて用いたのが始まりとされている。1955（昭和30）年に近畿地区盲学校柔道大会が開催され、この頃から各地区の盲学校間で試合が行われるようになった。1986（昭和61）年に日本視覚障害者柔道連盟（視柔連）が設立され、その年に第1回全日本視覚障害者柔道大会が講道館で開催された。1988（昭和63）年のソウルパラリンピックから男子の柔道が正式種目となり、2004（平成16）年のアテネパラリンピックからは女子も正式種目となった。2008（平成20）年に第1回全国視覚障害者学生柔道大会が開催され現在に至る。

＜視覚障害者柔道のこれから＞

視柔連では現状の課題として、競技人口が少ない、指導者が少ない、競技成績が落ちている、の三つを示している。

競技人口が少ないという課題を解決するために

は、イベントや講演会の回数を増やし、様々な場所や地域で行い、視覚障害者柔道の認知度を上げることが大切であると考えます。

指導者が少ないという課題を解決するためには、視覚障害者に対する指導方法の動画や本を作成する、指導者講習会を行うなど、指導の仕方を広めれば、指導者が増員されることが考えられます。

競技成績が落ちてきているという課題は、海外選手との試合や練習する機会が少ないといった要因が考えられる。そこで、一般の柔道の強化合宿に参加すれば、海外選手と組み合える回数が増え、海外選手特有のトリッキーな柔道にも対応する力が付き競技成績も上がっていくのではないかと考えます。

視柔連では競技の強化について考えている部分が多いが、視覚障害者柔道を発展させるためには、視覚障害者柔道を競技の面だけでなく、リハビリテーションや健康のために行うなどの視覚障害者柔道人口を増加させることが大切であると考えます。日本における柔道では競技としての柔道ばかりが普及しているが、ヨーロッパでは視覚障害者のリハビリテーションとして柔道が使われている。Gleser, J.M.らは、工夫した柔道の稽古を盲目と精神的遅滞の重複障害を持つ7名の子供達に行い、その身体的、心理社会的効果を検討した結果、柔道の効果を明らかにした。

視覚障害者にとって柔道は多くのメリットがある。競技として視覚障害者柔道を考えるだけでなく、視覚障害者の健康やリハビリテーションとして柔道を考え、視覚障害者柔道人口を増やしていくことが視覚障害者柔道の発展に繋がると考えます。

IV. 主な参考文献

- ・ NPO 法人日本視覚障害者柔道連盟ホームページ <http://judo.or.jp/>
- ・ Gleser, J.M., Margukies, J.Y., Nyska, M., Port, S. and Mendelberg, H. (1992) Physical and Psychosocial Benefits of Modified Judo Practice for Blind, Mentally Retarded Children: A Pilot Study. *Perceptual and Motor Skill* 74 : 915-925.